第二次世界大戦前の与那国島における祖納の集落特性

堂　前　亮　平

Ⅰ　はじめに

第二次世界大戦前（以下、戦前）、奄美・沖縄の島々のうち、比較的大きな島には、港を中心にマチ的集落が形成されており、そこで商店や各種事業所を営んでいたのは、多くは島外出身者、とりわけ本土出身者であった。これらの人たちは寄留商人とも呼ばれ、奄美や沖縄の島々で、一時的に居住して経済活動を行っていた。これは、廃藩置県以後経済活動の新開地であった奄美、沖縄へ経済活動を求めて、移住したものであるが、第二次世界大戦末期の沖縄戦が始まる頃に島を去った人たちも少なくない。

戦前、寄留商人町（寄留商人経営の商店が10店舗以上の集積がみられたところ）が形成されていたことが確認されているのは、奄美諸島では、奄美大島の名瀬、古仁屋、徳之島の亀津、沖永良部島の和泊、琉球諸島では沖縄本島の那覇、名護、糸満、久米島の儀間、宮古島の平良、石垣島の四箇であるが、その全貌は明らかになっていない。筆者は、これらの中で奄美大島の名瀬、古仁屋、宮古島の平良、石垣島の四箇について、戦前のマチを地図上に復元し、島外出身者の経済活動の一端を明らかにしてきた（堂前、1995, 2003, 2007）。

このように奄美・沖縄の島々に島外出身者とりわけ本土出身者が来島し経済活動に従事するための拠点としてマチを形成してきたが、与那国島の場合はどのようなものであったかを明らかにすることが本稿の目的であり、筆者のこれまでの研究の一環として位置づけるものである。すなわち与那国島の中心集落である祖納集落が、戦前どのような地域特性をもっていたかを、商店や事業所を経営していた人の構成に視点をあて、明らかにすることである。祖納集落の地域特性を探ることは、与那国島全体の地域特性を明らかにすることでもある。

与那国島は、日本最西端に位置し、八重山諸島の石垣島から127キロメートル、沖縄本島那覇市から520キロメートル、また台湾の蘇澳（すおう）港までは111km という至近距離にあり、国境の島である（図１）。しかし、戦前において日清戦争以後は、台湾は日本の統治下になり、与那国とは同じ経済圏として、交易が行われたほか、人々の生活圏として、就職や出稼ぎ、学校生徒の修学旅行も行われていた。

島の面積は、28.52平方キロメートル、周囲27.49キロメートルで、沖縄県では８番目に大きな島である。戦前の人口は1935年（昭和10）で4,553人であった。戦後の直後には国境の島として密貿易が盛んに行われていたという特殊な社会背景があり、一時的に人口は１万2,000人余に達していたが、2005年（国調）現在は、1,781人までに減少した。

産業は、戦前は水稲、甘藷、畜産などの農牧畜業、漁業、織物、カツオ節製造業などであったが、戦後の産業はサトウキビ、水稲、畜産などの農牧業、水産業は現在カジキマグロやアカマチなどが多く水揚げされ、かつて盛んだったカツオ漁業は衰退してきた。また、伝統工芸である与那国織も地場産業として与那国島の経済に寄与している。また島と島外とを結ぶ航空路は島の生命線であり、1987年（昭和62）には大型機が就航し、人々の往来が活発化してきた。近年は観光で訪れる人々も増加してきている。

集落は、祖納（2008年世帯数504、人口1,052人）、久部良（世帯数228、人口476人）、比川（世帯数55、人口129人）の３つの集落があり、祖納が与那国島で最大の集落となっている。

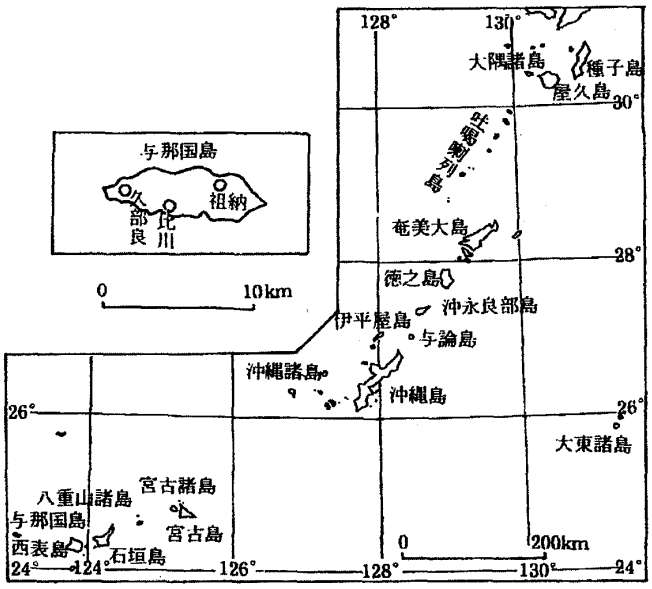

図１　与那国島の位置

Ⅱ　第二次世界大戦前の祖納集落における商店・事業所

与那国島に他府県から移住してきた人たちについて、1894年（明治26）８月に与那国島に来島した笹森儀助の『南嶋探検』のなかで、「他府県ヨリ寄留戸数八、口数十七、内（男十二人、女五人）」と記録されており、当時すでに他府県人が来ていたことがわかる。

表１および図２は、戦前の昭和10年代の祖納集落における商店や各種事業所および公共機関を示したものである。

祖納の集落は、島の北岸中央部よりやや東寄りに位置し、小さな湾入したところに波多浜と波多港があった。この港を中心にして、集落が広がり、与那国村役場、与那国郵便局などの公共機関の施設、それに20余の商店や事業所が存立していた。これらの業種の特色をみると、宿泊施設としての旅館が２軒、鰹節工場も３工場存立していたことは港町の特色であり、また医院が３軒存立していたことは、島という完結した生活圏の特色がみられる。

また、船舶による交易活動を行っていたのは、高知県出身の田村であり、航海船「魚音丸」（1927年～1944年）で、与那国を起点にして石垣と台湾との運航を行っていた。石垣より台湾

との運航が多かったという。台湾への出稼ぎの人たちの運搬や、豚、鮮魚などの積み出しも行われていた。なお、与那国と石垣と台湾を運航する船舶には、与那国村営の 航海船「帆安丸」があった。与那国村有船「帆安丸」は、30トンクラスの船舶で与那国から台湾基隆と石垣を結んでいた。台湾航路は、祖内港から台湾の基隆港まで約15時間、蘇澳（すおう）港まで８時間から10時間の所要時間であった。

那覇出身者の経営になる田頭商店は、与那国では最初の２階建ての建物であり、雑貨店として米、大豆などの穀物や雑貨などの販売のほか、夏にはキャンディも売られていたという。また鰹船もあり、手広く経済活動を展開していた。

祖内集落の中に、市場があり、魚、野菜、豚・牛・鶏肉が売られていた。屋根のある建物で、朝から夕方まで開いていた。特に魚が多く売られており、野菜は、漁村である久部良集落の人たちの購入が多かったという。

酒は自家用として多くの家庭でつくられていたが、のちに酒の製造、販売は久部良宅だけになった。ここで製造された酒は棚原と慶田本でも販売された。

経営者の出身をみると、鰹漁業や船舶の運航など大きな資本が必要とする業種の経営に従事していた人たちは、島外出身者が多かった。祖内集落の商店・事業所21のうち、島外出身者の経営によるものは７であり、３分の１を占める。これを石垣島の市街地である四箇の場合と比較すると、四箇では155の商店・事業所のうち島外出身者の経営によるものは108で、64％を占めており、その割合は祖納集落の２倍近くにのぼる。すなわち、祖内集落では地元出身者の割合が高いということである。このことは、島外から大きな資本を投入して経済活動を行う経済対象としての与那国島は石垣島よりはるかに小さいことを物語っている。しかし逆に島外から参入が少なければ、地元の人たちが経済活動を行える機会は増大する。島は、島で暮らす人々の完結された日常生活圏であり、日常生活に必要なものが一通り揃っている必要があり、それを提供する場としての商店や事業所の経営には、比較的小さな資本でも可能であり、地元の人たちの参入を容易にした。

表１　昭和10年代、与那国村祖納における商店、事業所

No	店・事業所名	経営者の出身地	主な扱い商品、事業所内容
1	浜の屋	与那国	料亭
2	入波平旅館	与那国	旅館
3	崎原商店	沖縄	雑貨
4	田頭商店	那覇	雑貨、鰹節製造 No11 と同じ経営者
5	新嵩鰹節工場	与那国	鰹節製造
6	仲嵩鰹節工場	与那国	鰹節製造
7	慶田本酒店	与那国	酒販売
8	池間医院	与那国	医院
9	田村商店	高知県	雑貨、船舶の運航
10	入仲理髪屋	与那国	理髪

11	田頭鰹節工場	那覇	鰹節製造、No 4と同じ経営者
12	野口商店	鹿児島県	雑貨、衣類、日用品
13	佐久川理髪屋	与那国	料亭、理髪、銭湯
14	仲嵩医院	与那国	医院
15	入松田	与那国	染物、織物
16	市場		魚、野菜、肉
17	入福旅館	与那国	旅館
18	前楚	与那国	豆腐
19	棚原酒店	与那国	酒の販売
20	田積	大阪	金融
21	内田医院	本土	医院
22	久部良酒製造	与那国	酒の製造、販売
23	浦添醤油	石垣	醤油製造、販売

公共施設として、次のようなものがあった。

A　与那国村役場　　B　与那国尋常小学校　　C　産業組合（1938年設立）

D　青年会　　E　与那国郵便局　　F　巡査駐在所

資料；久部良勇幸氏、西銘行雄氏からの聞き取りによる。

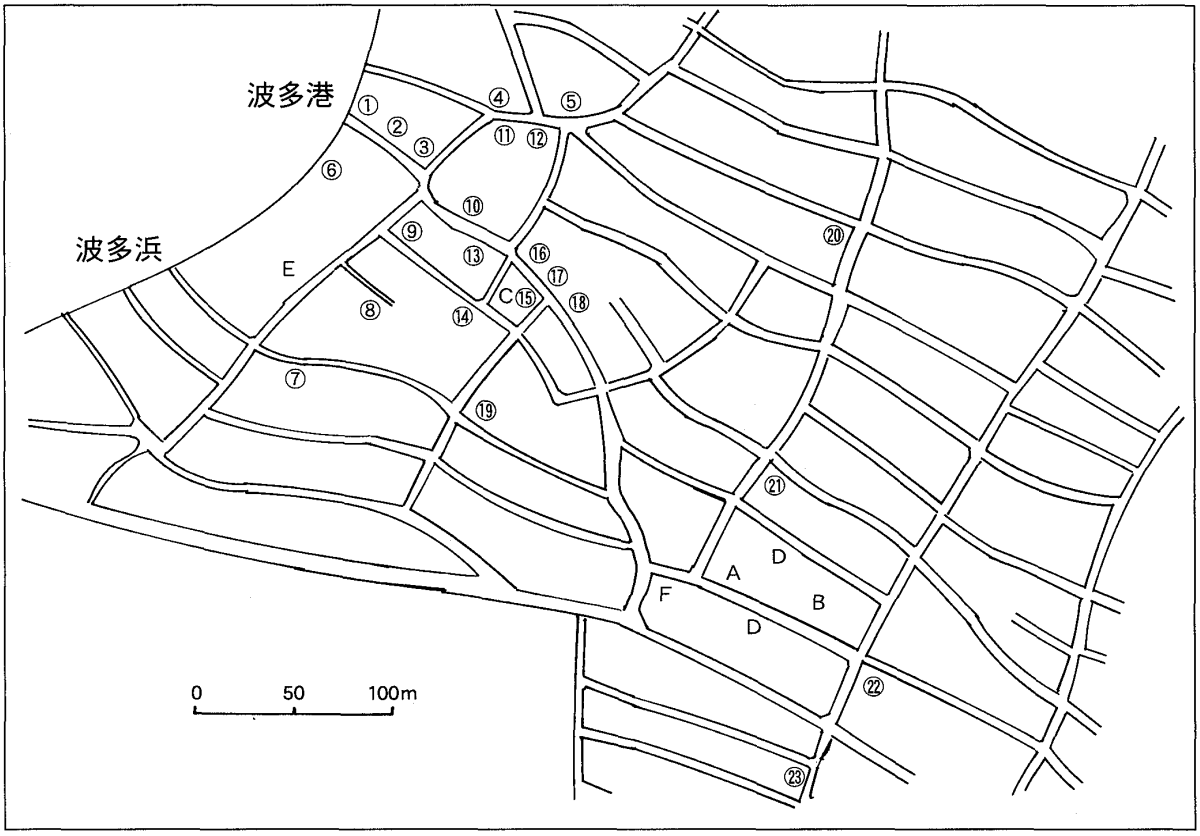

図２　昭和10年代、与那国村祖納における商店、事業所、公共施設の分布図

地図中の番号および記号は、表１の番号および公共施設の記号に対応する

Ⅲ　戦前の与那国島の経済的基盤

与那国は、1914年（大正３）４月１日八重山村から分村し、与那国村となり、戦後の1948年12月１日町制を施行し、１島１町を形成している。

1935年（昭和10）10月１日の国勢調査による与那国村の世帯数は916世帯、人口は4,553人であった。ちなみに、八重山郡全体では、世帯数6,889世帯、人口34,078人となっており、与那国村が八重山郡の中で占める割合は、世帯数で13.3％、人口で13.4％となっている。ちなみに、2005年現在では、与那国町の人口（1,781人）は、八重山郡の人口（51,131人）のわずか3.5％を占めるに至っている。

池間栄三によると「第二次世界大戦までの産物は、農業から米、黒糖、漁業から鰹節、鮮魚等を出荷していた。旗漁、鰹の漁獲は今日も盛んである。副業は養豚が主であった。（1913年に前田清氏と池間マント女が宮崎県からパークシャ種を輸入して、初めて豚の品種改良が行われた）。取引市場は石垣と那覇であったが、1920年代より台湾基隆および蘇澳（すおう）との取引が盛んになり、台湾銀行券が通用した時代もあった。那覇方面への輸出物は米，黒糖、鰹節等であり、台湾方面へは豚、鰹節、鮮魚等であった。」と記している。

戦前の与那国村の産業の状況を1935年（昭和10）の「八重山郡概況」によって概観する。

まず、農業の中で稲作についてみると、与那国村の作付面積は3,634反で、石垣町（5,820反）、大浜村（5521反）、竹富村（6,500反）と比較しても、大きな差はなく、島の面積からみれば、与那国は稲作の盛んな島であったことが読み取れる。しかし、畑作の甘蔗（サトウキビ）の栽培は、与那国村の作付面積はわずかに53反であり、大浜村の866反、竹富村の630反、石垣町600反、と比較してもサトウキビ作はわずかであったことがわかる。また養蚕もわずかであった。これに対して、甘藷（サツマイモ）をみると、与那国村では稲作作付面積とほぼ同じの3,650反となっており、主要食糧作物として栽培が盛んであった。八重山群島全体をみても、全耕地の半分が甘藷である。

また、畜産については、町村別統計がないため、八重山郡全体での把握になるが、八重山郡の農家戸数が約4,400戸であるが、家畜別に飼養戸数をみると、豚4,459戸、牛2,515戸、馬1,683戸、山羊・緬羊1,610戸である。先述したように池間栄三によると、与那国島で副業は養豚が主であったと記していることからも、家畜の飼育が盛んであったことがわかる。

つぎに、水産業についてみてみる。八重山諸島の周辺は、黒潮が北上する海域であり、魚類の豊富な漁場となっている。[1)]

与那国町史（別巻Ⅰ）によると、「与那国の鰹漁業は1901年（明治34）年、鹿児島県出身の寺前嘉次郎が、奄美大島を経て与那国を訪れ、クリ舟十隻くらいで曳縄鰹釣漁業を行ったことに始まる。これが八重山でも曳縄釣り漁業の初めといわれている。一方糸満出身の玉城徳は1905（明治38）年、白山丸という帆船で鰹の竿釣漁業をはじめた。」と記している。[2)]

1935年（昭和10）の町村別水産業者数、漁獲高の実績について見てみよう。

漁労者数でみると、石垣町681人、大浜村52人、竹富村422人、与那国村405人となっており、

総人口に対する割合でみると、石垣町4.4%、大浜村0.9%、竹富村4.9%であるのに対して、与那国村は8.9%と高い割合を示している。また、製造でみると、石垣町105人、大浜村０人、竹富村145人、与那国村224人と八重山郡のなかで最も多い。この製造は、ほとんどが鰹節製造である。

また与那国村の水産物を漁獲高と製造物の生産高をみてみると、漁獲物10万1,645円、製造物９万2,110円、合計15万3,755円となっている。この水産物の漁獲高と製造物の生産高の金額は、与那国村の稲作の生産高19万9,070円、甘蔗13万2,720円となっており、この当時の与那国では最も高い生産高をあげていた。

表２　八重山郡における水産物の漁獲高および製造品生産高（1935年）

町村	漁獲物（円）	製造物（円）	養殖（円）	計（円）
石垣町	123,776	133,465	800	258,041
大浜村	765	—	—	765
竹富村	71,652	83,260	—	154,912
与那国村	101,645	92,110		193,755
計	297,838	308,835	800	607,473

資料：沖縄県振興計画課『八重山郡概況』昭和10年

漁業が盛んなのは、久部良集落である。これは、島の南側に良い漁場があることや、港として地形的に良い場所であったために、ここに漁村が形成されてきた。与那国島の久部良集落の形成は、明治の終わり頃から人が移り住みはじめ、鰹漁業が盛んになるにつれて糸満や本土からの移住者が増加してきたといわれる。

戦前、久部良集落に鰹節工場を経営していたのは発田と長浜であった。最初に鰹節工場を設立したのは、鹿児島県出身の長浜静一郎の叔父にあたる寺前嘉次郎であった。その後、宮崎県出身の発田貞彦が鰹節工場を設立した。昭和の始め頃には、東洋一といわれた大きな工場が建てられた。

与那国町史（別巻Ｉ）には「発田は久部良に製氷施設を具備する近代的な鰹節工場を設立し、最盛期の1935年（昭和10）には漁船23隻（うち専属13隻）漁民150人、工場従業員50人を擁し、年産額は20万円に達していた。」と記している。

長浜鰹節製造工場では、約40名の従業員が鰹節製造に従事していた。長浜鰹節工場で鰹節製造に従事していた人たちは祖納の人が多かったという。また漁船も３隻持っていた。[3] 鰹節の製品は、石垣の南海商会に委託販売をしてもらい、その製品の多くは、本土へ売られていった。

戦前、久部良集落において鰹漁業と鰹節製造業を営んでいたのは、発田と長浜であったが、鰹漁業のみは他に川原力三郎（愛媛県）、岩切平次（宮崎県）、迫田貞熊（宮崎県）、また祖納集落には、尾辻新兵衛（鹿児島県）が戦前の一時期鰹節工場を経営していたが，後には商店（野口商店）を経営していた。また、鰹漁業をしていた真謝林太郎（与那国）は祖納集落に料亭

「浜の屋」を経営していた。

このように与那国の鰹漁業は、本土出身者によって始められた。また、ヤマト系といわれる本土出身者は姻戚関係にあった。すなわち、発田と川原、岩切、それに久部良集落で雑貨店を経営していた高知県出身の山本とも姻戚関係にあった。また長浜と尾辻も姻戚関係にある。

発田によって建立されたという金刀比羅宮も久部良集落のナータ浜を見下ろす高台にあり、本土系統の神を勧進したことは本土出身者のアイデンティティーとして象徴的なものといえよう。

Ⅳ　結び

本稿は、廃藩置県以後、経済活動の新開地であった奄美、沖縄の島々に、多くの人々、とりわけ本土から経済活動を求めて来島し、その経済活動の拠点としてマチを形成してきたが、与那国島の場合は、その中心集落である祖納集落が戦前どのような地域特性をもっていたかを、商店や事業所を経営していた人の構成に視点をあて、明らかにしたものである。

与那国島の場合は、次のような特色がみられる。

1）中心集落である祖納集落において、1935年（昭和10）では、経済活動の施設としての商店や事業所は23あり、これは島の人口（4,553人）1,000人当たり5.1である。これを石垣島の中心市街地である四箇と比較してみると、同時期の四箇の商店・事業所数は169あり、石垣島の人口（20,948人）でみると1,000人当たり8.0であるが、四箇の場合は八重山諸島の中心地であることから、八重山郡の中で与那国村を除いた人口（29,525人）でみると、1,000人当たり5.7となり、人口比では祖納集落の場合とそれほど変わらない。すなわち、当時、与那国島には島の人口規模に対しては、商店や事業所の集積が比較的多かったといえよう。この背景としては、鰹漁業、鰹節製造業を主とした産業が盛んだったこと、台湾、石垣という市場の中間に位置し、交易が盛んだったことがあげられる。

2）祖納集落の商店や事業所を経営する人の出身地をみると、祖納集落の場合、地元与那国島出身者の割合が高いことが特色としてあげられる。すなわち、島外出身者の割合は、石垣島の四箇の場合は169の商店、事業所、料亭のうち、63経営者が地元石垣であり、他は島外出身者である。すなわち63％が島外出身者である。祖納集落の場合は、島外出身者は36％を占めるだけである。ちなみに、宮古島平良の場合は、商店と料亭だけであるが、70の商店と料亭のうち経営者が宮古の人はわずかに11人で、その割合は16％、他の84％は島外出身者であった。

3）奄美・沖縄へ進出する本土の人々は、おおむね大きな資本を有する経済活動に従事しているが、与那国島の場合は鰹漁業・鰹節製造、海運、それに穀物をはじめ多種の商品を扱かう大きな商店である。海運の場合はある程度の大きさを有する船舶が必要であり、与那国では高知県出身の田村が航海船「魚音丸」で石垣と台湾を運航していた。一方、鰹漁業や鰹節製造は、漁場や漁港との関係で久部良集落が中心となるが、ここには島外とりわけ九

州や四国からの人たちが経済活動に従事していた。

本稿を作成するに当たり、現地調査では与那国町教育委員会田盛眞吉教育長をはじめ教育委員会の方々、町史編纂委員会事務局米城恵氏、また池間苗氏、久部良勇幸氏、西銘行雄氏、長浜一男氏ほか多くの方々に大変お世話になりました。ここに記してお礼を申し上げます。また、現在編纂されている「与那国町史」は、「島」に軸足をしっかりと置いた地域の記録であり、島という小宇宙のなかでの人々の暮らしがひしひしと伝わる地域史誌であり、大いに参考にさせていただきました。

なお、本研究は、沖縄国際大学南島文化研究所の与那国町総合調査共同研究によるものであり、調査の機会を与えてくださった南島文化研究所に対して、感謝を申し上げるしだいです。

注

1）与那国島における鰹業の始まりについて、池間栄三はその著書のなかで、「鰹節製造業、1895年頃宮崎県人によって始められた。島民はその業者をサカヤ船の名で記憶しているだけである。爾来、島民は鰹の釣方及び鰹節の製法を会得するようになった。このサカヤ船と前後して糸満出身の玉城（屋号ナビサ）氏が久部良で鰹業を行なった。それからサカヤ船の後をうけて、鹿児島県出身の尾辻新兵衛氏が鰹業を盛んにした。1916年に真謝林太郎氏が初めて電気着火による機械船を使用して、鰹業を行なった。それ以前の業者は皆帆船を使用していた。ホロと称する擬餌を使用して、鰹を釣る　縄法を創めたのは、宮崎県人迫田貞熊氏である。この方法は1919年頃より用いられ、小型漁船の鰹漁に偉大なる貢献をした。この擬餌を改良して、大いにひろめた人は愛媛県人川原力三郎氏であった。」と記している。

2）戦前に与那国島の鰹漁業や鰹節製造業に尽力された人たちについて、町史（別巻Ⅰ）のなかで紹介している。これによれば、

①川原力三郎―1921年頃、生餌を用いずに羊の角で作った擬似餌をつかって鰹を取方法を思いつき、鰹漁の発展に貢献した。

②尾辻新兵衛―明治時代に与那国に来島、鰹漁を中心に与那国の水産業の振興に尽くした。

なお、寺前嘉次郎、玉城徳、発田貞彦については本論中に引用している。

3）長浜一男氏によれば、川原は「日吉丸」、発田は「日向丸」などが知られている。

長浜カツオ節工場では、戦前の漁船としては「二見丸」、「重宝丸」、「大宝丸」があった。

参考文献

池間栄三（1957）：『與那国の歴史』192p.

(財)沖縄県文化振興会 古文書管理部 史料編集室編（2000）：『沖縄と台湾 沖縄県史ビジュアル

版 近代①』沖縄県教育委員会，61p.

笹森儀助著、東喜望校注（1982）：『南嶋探検１琉球漫遊記』平凡社，279-301.

堂前亮平（1995）：近代期、宮古島平良における商業空間の特性―寄留商人街をめぐって―. 地域研究36-1，1-11.

堂前亮平（2003）：近代期、石垣島四箇の商業空間に関する若干の考察. 沖縄国際大学南島文化研究所「石垣島調査報告書（１）」，115-132.

堂前亮平（2003）：近代期、奄美大島名瀬における商業空間の特性. 久留米大学文学部紀要情報社会学科編，創刊号，7-24.

堂前亮平（2007）：古仁屋商店街の変遷. 瀬戸内町誌歴史編編纂委員会編『瀬戸内町誌 歴史編』瀬戸内町，554-568.

吉川博也（1984）：『与那国　島の人類生態学』三省堂，257p.

与那国町史編纂委員会（1997）：『与那国 町史別巻Ｉ記録写真集』与那国町役場，320p.

与那国町史編纂委員会（2002）：『与那国島 町史第１巻』与那国町役場，484p.